

■**小山肆成** 江戸末、日本で初めてワクチン(牛痘)を開発した医師。和歌山県では“北の(華岡)青洲、南の蓬洲”と称えられる。

こやましせい

ワッ船狼藉・1807＝

紀伊国牟婁郡久木村(和歌山県西牟婁郡白浜町久木)で、藤原鎌足の血を引く皇族の末裔、紀州藩の地侍として、行政や医療に携わる名家小山家の5人兄弟の四男に生まれる。幼名は小文治。通称は敬介。号は蓬洲。

奈良時代に、藤原不比等の男子4人全てがほとんど同時に死んで、政治が大きく転換したのを代表に、古来、天然痘は、日本人の死に最も大きく影響した伝染病で、流行時には国民の3割もが感染したと言われるが、江戸時代に入っても、伊達政宗が独眼竜になったのも、5代將軍綱吉が死んだのも、天然痘に罹ったことによるように、その状況はあまり変わらず、恐怖の病とされてきた。

黒住教・・・1814＝7歳：古座川沿いで100人余が死去した天然痘の惨状を目の当たりにし、死亡率がおよそ30%というほど高いのに、悪霊払いやさまざまな迷信で祈るばかりで、治療する術の無いことに怒りを覚える。

伊能測量終・1816＝9歳：肆成誕生の3年前に、世界初の麻酔法によって乳癌摘出手術に成功した、紀伊国那賀郡出身の医師華岡青洲のもとには、全国から入門者があり、この年、大坂中之島に分校(合水堂)を開設するに至っている。

水野忠成老中1818＝11歳：

名家の子らしく、背が高く大柄に育ったらしい。

英船浦賀来航1822＝15歳：医師を開業していた兄文明を追って、医学の進んだ京都に出るも、到着する前に、兄が志半ばで急逝。  
シボク朴来日・1823＝16歳：兄の師であった岡田南涯について儒学を学ぶとともに、京都の名漢方医で典薬寮医師の高階経宣(枳園)に入門し、兄の無念を晴らすべく、猛勉強を開始。

シボク朴鳴滝塾1824＝17歳：この年、10数年前にロシアに拉致され、牛痘を持ち帰った中川五郎治が、田中正右衛門の娘イクに施したのが日本初の種痘とされ、この頃、蝦夷地で起こった3度の天然痘の大流行にも、彼が種痘を施したらしい。

異国船打払令1825＝18歳：

さらに本草学も学んで、医師として認められ、京都烏丸に{東風館}を建て開業した。

高島砲術・・・1834＝27歳：

滑稽+人情本 1835＝28歳

・・・1836＝29歳

紀州藩奥医師格になっていた華岡青洲が死去、  
\*甥の一家が天然痘で死んでしまったの知らせに悲嘆、治療法が見つからない以上、そもそも、天然痘に罹らないようにする予防をめざして研究を開始、

大塩平八郎乱1837＝30歳：白浜の上流玉手村に伝わる「山片家文書」には、'痘瘡がはやり、村全体45軒中、30軒が死に絶えてしまった'と記されている。エドワード・ジェンナーが、乳しぼりをする女性が天然痘の罹りにくいことを知って思いつき、40年ほど前(1796年)に開発に成功した天然痘ワクチン、感染した牛から作る牛痘が世界各地に伝わり始めるも依然鎖国時代、牛痘が、中国経由で長崎出島にもたらされるのを待つしかない状況のなか、

天保改革始・1841＝34歳：師の高階枳園が、10年前に、中国の邱浩川が牛痘法について著した「引痘略」を譲ってくれ、熟読するも、肝心の牛痘の作り方が書いていなかったため、自ら作ろうと、大坂天王寺の牛のセリ市に何度も赴いて、発疹している牛を探すも見つからず、ついに、子牛を入手して感染させようと、妻けいに頭を下げて購入するも、うまくできないうち、

順天堂始・・・1843＝36歳：ようやく市場で痘瘡を持つ子牛を発見するが、購入資金が尽きていたため、兄文明から'治療を間違え患者を死に至らしめたら切腹せよ'と渡された形見の刀を、'多くの人を救うために許して欲しい'と金に換えて入手、中国の薬学の古書「本草綱目」に、'牛の虱が天然痘を治す'とあるのを見出し、牛の血と膿を混ぜてみると、ついに、牛痘になったのである。

阿部正弘首座1845＝38歳：

・・・1847＝40歳

普及させるべく、京都・大坂・江戸で、牛痘法の解説書「引痘新法全書」を自費出版し、罹ると危険な子どもを対象に種痘してみようと、町の人々をお願いするも、'子どもが牛になったらどうするのだ'などと、皆から拒否され、困り果てたところ、

北斎没・・・1849＝42歳：くしくも、ドイツ人医師モーニックがオランダ領から牛痘を持ち込んで、長崎に種痘所を開設した年、\*妻けいが、自ら実験台になろうと申し出てくれ決断、種痘数日後、発疹が出、発熱するも、10日後には回復、ついに、日本で初めて、国産の天然痘予防弱性ワクチン「牛化人痘苗」の実験に成功すると、妻の腕から、瘡蓋を採取し、"牛痘の素"として大切に保存するとともに、町の人を説得して回ると、少しずつ、子どもに種痘を許す親が出て来、その子たちが天然痘に罹らなかったことから、評判になって行く。妻に種痘した様子を詳細に記した「引痘新法全書附録」も出版、確かな証拠として、偏見を少しずつ無くして行く。

万次郎帰国・1852＝45歳：この年発行の、京都の一流文化人を紹介する「平安人物志」の、2番目に名が挙げられるほどになり、  
ペリー来航・1853＝46歳：

「引痘新法全書」「引痘新法全書附録」いずれも{東風館}蔵とあるので、開業以来務めていた京都{東風館}から、故郷紀州藩の医師全てにも、牛痘を伝え、藩内での患者を激減させたことから、和歌山県では、今日まで慕われているのである。

五ヶ国条約・1858＝51歳：舶来の牛痘が広まり、江戸の蘭方医たちが、幕府の許可を得、神田お玉ヶ池に種痘所を開設するも焼失、

桜田門外変・1860＝53歳：再建されたお玉ヶ池種痘所は、大槻俊斎を頭取に、幕府直轄になる。

遣欧使節・・・1861＝54歳：

生麦事件・・・1862＝55歳：

京都で、没した。  
1980年、WHOが天然痘撲滅宣言、ワクチンという方法で、人類史上唯一の伝染病撲滅に至ったが、その後のワクチンづくりにおいても、牛の血清は欠かせないものであることが判明、ワクチンの語は、まさに、ラテン語の牛(VACCA)から来ているのである。ジェンナーが牛痘法を開発した時も、周囲からそっぽを向かれたが、世界中の人が使えるように、特許申請せず自費出版したことも付け加えておきたい。西洋医学が公式に採用されるのは、もちろん明治維新になってからである。